

必死に堪えていると、そのうちに鷹宮が「大人しすぎて面白くねえな」と不穏なことを呟いた。

ぞくりと、背中を悪寒が走る。

直後、鷹宮がぐるりと手首を返し、粘膜を擦った。

下腹部の内側——ちょうど性器の付け根あたり。

そこを突然ぐりぐりと捏ねられ、湊は思わずびくりと体を揺らしてしまう。

「あっ！ な、なにっ、そこっ……うえっ?!」

鷹宮は、ぐちぐちとそこばかりを執拗に狙って指を動かしている。

これまで感じていたのは、ただの圧迫感と違和感だけだったはずなのに、そこだけは違った。

逃げたくなるような、むず痒さが一気に込み上げてきて、体がぴくん、ぴくんと勝手に跳

ねる。

湊は無意識に身を振った。

けれど、鷹宮ががちりと腰を抱え込んでくるせいで、ほとんど身動きが取れない。

「んっ……あっ、鷹み、や……そこっ、なんか変っ……やつ、あっ！」

「ホモセックス未経験の割には優秀だな」

「えっ、な、なにっ……んんっ」

「前立腺ってしらねえの？」

「ふえっ、なにそ、れ……んあっ、ああっ！」

その部分を蹴られるたび、ぞくぞくとした感覚が積み上がり、背中が痺れる。

なにこれ。なんだこれ。やばい。

未知の感覚に一步、足を踏み入れてしまった。怖いような、委ねたいような、曖昧な気持

ちになる。

(き、気持ちいいかも……)

男に指を突っ込まれて、何を考えているんだと思う。だから、言葉にはしなかった。けれど、その僅かな態度の変化に、鷹宮は気づいたらしい。

「んあっ！」

ずるり、と指が引き抜かれて、思わず吐息が漏れる。

まだ状況を把握できないまま、ソファの上でごろりと体を返された。

下半身はあられない姿のまま、仰向けで鷹宮を見上げている。

「気に入ったみてえだから、いいもん突っ込んでやるよ」

鷹宮はニヤリと笑い、啜えていたタバコを灰皿に投げ捨てた。

そして手に取ったのは、湊にも見覚えのあるものだった。

「いや、まてまてまて、それって女の子に使うやつじゃん」

「取説捨てたからしらねえ」

「そういう問題じゃないでしょうが！」

慌てて手を伸ばすが、あっさりかわされ、さらにペチンと叩かれる。

鷹宮が持っているのはバイブ。しかも、妙にリアルで黒くて、エグい。

「おら、テメエで足もて」

「え、やだっ、それ」

「あ？」

「だって、めっちゃでかいぞ、それ」

「俺のちんこのがデケエ」

「いや、そうかもだけど！ 流石にそれ突っ込むのは、男としてのプライドが――」

「はっ」

鼻で笑われ、言葉を失う。

口角を上げたままの鷹宮の目は鋭く、容赦するつもりなど一切なさそうだった。

腿裏に手を差し入れられ、ぐいっと足を持ち上げられ、「自分でもて」と、もう一度言われる。

無駄な抵抗だと分かっているながら、めいっぱい躊躇った。

けれど、借金、暴力、そしてさっきまでのことを思い出すと、耐えるしかないという気持ちに追い詰められる。

仕方なく、自分で膝裏に手を入れ、両足を持ち上げた。

——ピコンッ。

電子音が鳴り、鷹宮が片手に持ったスマホをこちらに向けてくる。

「と、撮るなって……」

泣き出しそうな声が漏れる。

とにかく、この場を切り抜けることだけを考える。抵抗するより、従うしかない。

「笑えよ。瀬戸」

スマホのカメラがこちらを向き、容赦なく鷹宮の声が追い詰めてくる。

笑おうとするが、頬がうまく持ち上がらない。尻の穴にバイブをぐりぐり押し当てられていて、怖い。

——グチュツ。

「あつ、んんっ」

圧迫感が粘膜を押し広げる。思わず視線を向けそうになり、慌てて逸らした。

何が楽しいのか、鷹宮はバイブを入れ込まれていく湊の顔を、熱心に撮影している。

その画像をどうするつもりなのか——考えが及びそうになり、慌てて思考を止めた。

ふうふうと息を吐く。だが、まだ整わないうちに、鷹宮は容赦なくカチリとバイブのスイツチを入れた。

——ブブブブブ。

小刻みな振動が粘膜を揺らし、湊の体がぴくりと跳ね上がる。

「あっ、あっ、まって……だっ、だめだ、これっ！」

咄嗟に手を伸ばそうとするが、鷹宮がそれを払い、さらに脚を肩に担ぎ上げるように身を寄せてくる。

「あっ……んっ♡ あっ、ああっ♡ そこ、ぐりぐりすんなあっ！♡」

「やっべ、お前。バイブ突っ込まれて、ちんこびんにさせてんじゃん。いい画、とれてるぜ」

「はっ♡ や、やめっ……んんっ♡」

——ああ、やっぱり。

これ、この動画、ゲイポルノ的なやつで売られるんだ。最悪だ。

自分のこんな姿に値段がつくなんて信じ難い。けれど、ぐちぐちとバイブをねじ込みながら撮影を続ける鷹宮の姿を見ると、そうとしか思えなかった。

せめて顔にモザイクを入れてほしい……が、それは叶うだろうか。

——カチチチッ。

鷹宮がバイブのスイッチをいじると、さらに震えが小刻みに強くなった。

断続的になぶるようだった刺激が、押し当てられた一点に向けて、容赦なく追い詰めてくる。

「あ、あああっ♡ や、やだっ！　なんか、くるって！　やめっ♡　まって、やばいっ

……んあっ♡」

腰が、がくがくと勝手に震え出した。

腹の底から湧き起こるものが、解放を求めて駆け上がってくる。性器をいじる時とは違う、内部を強く押さえつけられ、それをまた引き上げられるような激しい脈動に、戸惑いが走った。

「んあっ♡ あっ、あ、ああああ——！」

——ビュクビュクビュクビュク！

駆け巡るものと共に、一気に腹の底から電流のような感覚が溢れ出す。体全体が意思に反して震え、直接性器に触れていないというのに、その根本の内側を執拗に刺激されたせいで、湊の先端はどろりと白濁を溢れさせていた。

けれど、波が止まらない。

鷹宮が、まだ震え続けるバイブを湊の内部に押し付けてくる。

「も、もう、勘弁してって♡ ああっ、無理、むりむり、またいくっ！ あ、ああああ
っ！♡」

腰はまだ震え続けている。

とてつもない疲労感があるのに、それとは無関係に、無理やり快感へ引っ張られてしまう。息ができない。視界が白む中、鷹宮が恍惚とこちらを見下ろす顔が見えた。

「……もうやつ♡ 抜いて、それ、抜いて♡」

過度な快感で、訳がわからなくなってしまう。

気づけば湊は、ぐずぐずと泣きながら、鷹宮に縋るように手を伸ばしていた。

それでも鷹宮は、まだ撮影を続けている。

むしろ、湊のこの反応を喜んでいるかのようだ。